

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 新作 慶明

近年、インド仏教学の分野では、アフガニスタンやパキスタン北部地域に加え、チベット地域に保存されるサンスクリット語写本が研究を活性化している。これらの写本には、インド中観学派に関係する文献も多く含まれる。後世、中観帰謬論証派の祖とも呼ばれたチャンドラキールティ（月称、600-650 頃）の著作には、主著の『入中論』に加えて、ナーガールジュナ（龍樹、150-250 頃）作『中論』に対する注釈『プラサンナパダー（明句論）』他がある。この『プラサンナパダー』は、『中論』の諸注釈の中でも唯一完本としてサンスクリット語写本が伝わる貴重な文献で、11 世紀以降のチベットでは、『中論』の最も重要な注釈と見なされてきた。20 世紀初頭に出版された本書のラ・ヴァレ・プサン校訂本はネパール系の 3 写本とチベット語訳を根拠に校訂され、これまで最も信頼度の高いテキストとして読み続けられてきた。しかし現在では、2 本の貝葉本を含む、総計で 16 本余りの写本が利用可能となり、『プラサンナパダー』研究も新たな局面を迎えている。

このような背景の下、本論文は、全体で 27 章から成る『中論』の中でも最重要の章として知られる第 18「我（アートマン）の考察」章に対するチャンドラキールティ作『プラサンナパダー』の批判的校訂本を作成したうえで、詳細な分析・考察を行う。

全体で 4 章から成る第 1 部の本論は、第 1 章において『プラサンナパダー』およびチャンドラキールティ作の関連作品の研究史を総括するとともに、本論文の目的と方法を論じる。第 2 章は『プラサンナパダー』第 18 章の文献学的研究と題して、校訂テキスト、章題、『中論』偈のテキスト、ならびに引用経論のチベット語訳に関わる問題を詳論する。第 3 章で新作氏は、12 偈から成る『中論』第 18 章の構成を明らかにしたのち、従来の研究では解明されえなかったテーマを設定し、詳しい考察を加える。心作用としての概念化（戯論 *prapañca*）を煩惱の根源と見なすナーガールジュナの意図をめぐり、注釈者であるチャンドラキールティ自身の解釈に焦点をあわせる。とくに新作氏は、『入中論』との比較考察を通して、チャンドラキールティが、煩惱論の観点から最も問題視されるべき概念として、同章の冒頭で批判的に考察される「我（アートマン、自身）」と「我所（自身に属するもの）」を位置づけているという新知見を導くことに成功した。第 II 部に置かれた批判的校訂本とその訳注研究もまた貴重な成果であり、第 1 部の本論における考察を基礎づけている。

以上のように、「我（アートマン）の考察」と題する『プラサンナパダー（明句論）』第 18 章の内容的な特質を、批判的校訂本を提示したうえで、関連資料を精査しながら広い視野から考察した本論文の成果はきわめて大きく、中観思想研究史における画期的な業績として高く評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述はみられるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに相応しい業績であると判断する。